＜４０００字概要＞

大正期の＜恋愛＞表象の領分

――セクシュアリティ・ジェンダー・植民地 ――

学際５年次　李　承信

本論文は、主に大正期の＜恋愛＞に焦点を当てて、それを横断的に捉え直そうとした試みであり、文学テクストだけでなく、＜恋愛＞に関する批評的テクスト群も視野に入れて検討したものである。したがって、特定の作家個人の研究に属するものではなく、＜恋愛＞とはいかなるものかという、＜恋愛＞概念の追求や、その変遷を時間軸に沿ってたどるものでないことを前提とし、＜恋愛＞の成立が歴史的であり、文化的な諸条件に支えられているという視座に立っている。その意味で、本論文で行った作業は、＜恋愛＞表象の文化誌ともいえる。なお、＜恋愛＞をめぐる表象が、セクシュアリィ・ジェンダー・植民地という問題系と、どのように関わっているかを考察し、複眼的に照射しようとしたのが、本論文の特徴といえる。

先行論のなかで、＜恋愛＞が明治期以後、翻訳語として日本に入ってきたという意見は、ほぼ定着しており、＜恋愛＞概念が＜色＞や＜恋＞に代わっていくプロセスを検討する研究がなされた。（**例えば、佐伯順子『＜色＞と＜恋＞の比較文化史』**） しかし、明治期の文学作品を時系列にたどるだけでは、大正期に入って本格的に浸透していく＜恋愛＞の概念・意味内容がはっきり見えてこない。むしろ、大正期における＜恋愛＞に注目することで、＜恋愛＞に関する文学作品だけでなく、＜恋愛論＞として大量に生み出される磁場が捉えられると考えられた。その意味で、本論文の考察対象と重なる、方向性が近接するものとしては、菅野聡美『消費される恋愛論―大正知識人と性』（青弓社、2001 年）が挙げられる。ところが、氏は「（引用者注、大正期の）恋愛論は一過性のブームで終わってしまった」と断定しており、果たして大正期の恋愛論が＜消費＞されてしまったのか、というのが本論文の問題意識であり、出発点となった。つまり、日本内地の＜恋愛＞は「終わってしまった」かもしれないが、少なくとも日本帝国全体においては、大正期の＜恋愛＞ブームが終息を迎えていなかったと考えられたからである。おそらく日本の統治下にあった韓国においては、大正期の＜恋愛＞ブームは続いていたことが推測された。たとえば、「3・1 運動以降朝鮮では自由恋愛に関する思想が急速に広がり、最初は西欧の個人主義思想から始まった恋愛至上主義

が、それを前後して日本の厨川白村の「近代の恋愛観」がインテリ層に絶対的な影響を与えた」（**イ・ソクフン「新恋愛論」『新東亜』、1932年12月**）という、当時の状況を勘案すると、大正期における＜恋愛＞を日本国内に限定せず、日本帝国の枠組みで捉える必要がある。それが＜恋愛＞表象の分析に「植民地」という観点を導入した所以である。

さらに、本論文は、＜恋愛＞がセクシュアリティ・ジェンダー概念と密接に関連していることを明確に意識したうえで、＜恋愛＞が社会・文化的コンテクストとどのように交渉し、いかに展開されていったのかを検討しようとした。まず、セクシュアリティは、明治期において既に文学の主たる主題として浮上していたが、大正期において、恋愛と性（欲）の関係を問題化する言説は大量に生産されていた。とくに大正期の＜恋愛＞ブームが、通俗性欲学が流布する 1920 年代に巻き起こっていた点は看過できない。大正期の＜恋愛＞は、「「性欲」が「恋愛」と拮抗し、それとの対比で語られる概念となった」（**赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房、1999年**）という側面に注意を払う必要があると考えられる。次に、セクシュアリティ研究が、ジェンダー研究と相互に密接な影響関係を保っていることは、それぞれの研究が明らかにしているところだが、とりわけジェンダーは＜恋愛＞において重要な問題であると論者は考えた。そこで、ジェンダーにまつわる問題系が、＜恋愛＞とどのように関わっているかという点は、本論文の重要な論点となった。

本論文は全 2 部 7 章構成をとった。第 1 章は、有島武郎の情死事件をめぐるメディア報道の様相を検討し、有島の＜死＞がもたらした社会的反響を具体的に示したものである。今までの先行研究は、有島の情死問題について、文学者有島武郎の＜死＞として捉える傾向が強く、＜恋愛＞という観点から捉えることはなかった。ところが、当時のメディア報道を見渡す限り、有島の＜死＞は＜愛＞の枠組みで表象される傾向が強く、とくに女性読者層のなかで顕著であることを明らかにした。それに、このような有島の＜死＞の表象は、空前の＜恋愛＞ブームの時代を背景にしていると指摘した。第 2 章では、今まであまり具体像が検討されなかった厨川白村の『近代の恋愛観』を分析し、大正期の＜恋愛論＞の一端を照らし出そうとした。白村の『近代の恋愛観』が、白蓮事件などを挟んでベストセラー化していく経緯に注目し、＜恋愛＞をめぐる磁場の変容を明らかにした。さらに、『近代の恋愛観』が「新理想主義」という立脚点から、生活革新の思想としての一面を保持している点を解明した。そのうえ、白村の＜恋愛論＞が明治期の＜両性問題＞議論を受け継ぎ、大正期の新しい意匠で構築された思想であると捉えた。第 3 章は、第 2 章の考察を踏まえたうえで、『近代の恋愛観』のベストセラー化のプロセスを確認し、その背景に出版ジャーナリズムの隆盛、

厨川白村の＜戦略＞といった二つの要因を想定した。この章では、日本国内だけでなく、中国や韓国においても『近代の恋愛観』の受容が行なわれる様相を明らかにした。第 4 章では、今まで翻案ものとして扱われてきた結果、研究の対象にならなかった内田魯庵の「女先生」というテクストを、セクシュアリティ・ジェンダーという観点から分析したものである。「女先生」が、当時の＜堕落女学生＞問題を素材に用いながらも、他の＜堕落女学生＞小説群とは一線を画し、＜堕落女学生＞言説の反措定として機能することを明らかにした。そのうえ、婚姻制度に直接結び付かない男女関係を、国家権力を侵犯するものとして断罪する構図を読みとった。第 4 章と問題意識を共有する第 5 章は、有島武郎の代表作『或る女』における時間的背景（明治 30 年代半ば）に注目し、当時の＜渡米＞ブーム、良妻賢母主義の再編といった同時代的コンテクストとの関連様相を考察したものである。その結果、『或る女』の＜渡米＞をめぐっては、男女ジェンダー間に異なる意味が派生することを確認し、葉子の場合、海外への脱出願望が託されていることを論じた。加えて、＜渡米＞が「擲身報国」の道になりえた当時のイデオロギーを浮き彫りにし、葉子にとって倉地との＜愛＞が、＜渡米＞と引き換えに獲得された意味を再考した。第 6 章は、李光洙の処女作「愛か」と山崎俊夫「耶蘇降誕祭前夜」とを比較考察した。「愛か」は、日本帝国の「内地」で創作された、韓国人によるもっとも早い時期の「日本語」小説であるが、「愛か」と＜少年愛＞というモチーフを共有する「耶蘇降誕祭前夜」の場合、「愛か」をプレテクストとして創作された可能性を提示した。従来、あまり注目されなかった二つのテクストには、それぞれ植民地知識人・李光洙の表象がみられ、そこには帝国主義と同性愛嫌悪（ホモ・フォビア）という二重の＜暴力＞のまなざしが働いていることを明らかにした。ひきつづき、第 7 章では、韓国近代文学の嚆矢という文学史的意義をもつ、李光洙の代表作『無情』を分析した。『無情』は、韓国の『毎日申報』に連載された長編小説であるが、実は 2 回目の日本留学の際に創作された点を重視し、『無情』におけるロマンティック・ラブが、明治期の＜恋愛＞言説と相似形をなしていると指摘した。その一方で、『無情』には大正期に入って台頭した新しい＜恋愛＞のパラダイムが反映され、日本における明治期の＜恋愛観＞、そして大正期の＜恋愛観＞がコラージュされていることを明らかにした。さらに、『無情』が「近代」思想としての＜恋愛＞を表現し、大衆を教化しようとした「啓蒙」小説であると捉えた。

本論文は、大正という時代区分において、＜恋愛＞表象を論じることによって、明治期に受容された＜恋愛＞が、いかに時代思想と交渉し、どのようにあらわれていたのか、その一端を明らかにしようとした。そして、本論文の考察から浮き彫りになっ

たのは、大正期の「宗主国」日本と「植民地」朝鮮、両方における＜恋愛＞のありようである。具体的には日本に留学し、文学的出発を果たした李光洙を事例として、今まで捉えきれなかった、両方の相互交渉的な様相を明らかにすることができた。このような本論文の問題意識と考察は、1920 年代前半韓国の＜恋愛＞ブームが、どのようにして巻き起こり、いかなる性格を有していたかを解明するためにも、非常に有効なものであると考えられる。